

A-6 日本語とブラジル・ポルトガル語における時間を表す複文節に見られる主節時基準現象の実態

— 話し言葉コーパスにおけるトキ節・Quando 節を中心に —

ヌネス・コスタ・ハイッサ（筑波大学大学院生）

要旨：本研究では、日本語とブラジル・ポルトガル語の時間を表す複文節における相対的テンスのあり方を明らかにすべく、実際の発話を扱う話し言葉コーパス（日本語話し言葉コーパス（CSJ）と NURC-RJ）を用い、トキ節と Quando 節という時間を表す従属節と主節のテンス・アスペクト形式の組み合わせとその時間関係を分析する。調査の結果、日本語の場合にはトキ節のテンス・アスペクト形式の時間関係が基本的に三原（1992）の「視点の原理」に従っているものの、主節と従属節のテンス形式が異なる場合に主節時が基準時（RT）にならない例も見られた。また、ブラジル・ポルトガル語の場合には RT を含意する形式以外にも、相対的テンスを採る例が僅かながら見られた。それらの例では、主節のテンスが従属節の RT になっている、あるいは従属節のテンスが主節の RT になっている。

1. はじめに

テンスとは、Event Time（出来事時、以下 ET）と Speech Time（発話時、以下 ST）、Reference Time（基準時、以下 RT）という 3 つの時点の外的時間関係を表す文法カテゴリーである（Reichenbach 1947）。また、Comrie（1985）では、テンスが ET と ST の時間的関係を表す場合には絶対的テンスと呼ばれ、ST とは異なる RT と ET の時間的関係を表す場合には相対的テンスと呼ばれるとされている。

日本語の複文では、従属節と主節のテンス形式が異なる場合がある。三原（1992）の「視点の原理」によると、その場合は従属節のテンスが ST を基準にせず、主節時を基準とする。この現象は相対的テンスの一種であり、主節時基準と呼ばれている。また、工藤（1992）では、テンスと従属複文の相関性は、主文の述語は発話時との時間関係を表し、従属文の述語は主文の出来事時との時間関係を表すようになる点に現れるとされている。

一方で、ブラジル・ポルトガル語（以下、ポルトガル語）では、相対的テンスは、Pretérito-mais-perfeito（大過去）や Futuro do pretérito（過去未来）という RT を含意するテンス形式について述べるときにのみ問題になるとされている（Ilari & Basso 2008）。また、主節時基準現象については管見の限り言及されていない。

本発表では、両言語の複文節における相対的テンスのあり方を明らかにすべく、実際の発話を扱う話し言葉コーパス（日本語話し言葉コーパス（CSJ）と NURC-RJ）を用い、主節と従属節の時間関係を表すトキ節と Quando 節を対照的に分析する。これにより、両言語の複文節のテンスに関する共通点や相違点を明らかにすることができる。また、これは翻訳規則を扱う機械翻訳に関する研究に貢献できるものである。

2. 先行研究

2.1 日本語のトキ節とテンス

濱田（1998: 1）によると、三原（1992）の考察対象は関係節、同格節、引用の「と」を含む節のみであるが、「ため」と「とき」を含む副詞節も「視点の原理」が比較的「透明な形で機能している」という。つまり、トキ節でも、従属節と主節のテンス形式が異なる場合は、従属節のテンスが主節時を基準時にすると解釈できる。

また、工藤（1992）では、トキ節は二つの出来事の同時性を表す複文節であり、従属節のテンス形式によって、その同時性が変わるとされている。トキ節のテンス形式がル形である場合は、文が表す同時性は主節の **ET** と従属節の出来事の限界達成前の段階との同時性である。それに対して、トキ節のテンス形式がタ形である場合は、文が表す同時性は主節の **ET** と従属節の出来事の限界達成後の段階との同時性である。

- (1) a. 学校に行く時、鐘が鳴っていた。 <限界達成前の段階と同時>
b. 学校に行った時、鐘が鳴っていた。 <限界達成後の段階と同時>

(工藤 1992: 175)

(1a) では、<鐘が鳴っていた>という出来事は<学校に行く>という出来事が限界を達成する前の段階と同時的に捉えられている。一方で、(1b) では、<鐘が鳴っていた>という出来事は<学校に行く>という出来事が限界を達成した後の段階と同時的に捉えられている。

さらに、工藤（1995:227-228）では、同時性を表す複文節の場合、(2) のように絶対的テンスが使われることもあると指摘されている。そういった場合に、タ形がアスペクト的には全体的に把握しつつ、二つの出来事間の全体的同時性が前面化されると指摘されている。

- (2) 先月、ロシアに行く時（=行った時）は、シベリア鉄道を使った。

(工藤 1995: 227)

以上のように、日本語のトキ節では、相対的テンスが使われる場合と絶対的テンスが使われる場合があるとまとめることができる。しかし、以上の先行研究では、実際の話し言葉を扱うコーパスにおけるトキ節のテンス形式の組み合わせと絶対的・相対的テンスの使用実態については言及されていないということが問題であると思われる。

2.2 ブラジル・ポルトガル語の Quando 節とテンス

ポルトガル語では、テンスのみではなく、ムード（直説法、命令文、説続法¹）活用もあるため、日本語より、テンス形式が豊かな言語であると考えられる。

Ilari & Basso (2008) によれば、ポルトガル語のテンス形式の一部には **RT** を設けなくてもその外的時間関係の解釈が可能であるが、大過去 (3) や過去未来 (4) 等のテンス形式には発話時と異なった **RT** が必要とされるという。

- (3) Quando eu cheguei, ele já tinha ido embora.

訳：私がついたとき、彼はもう帰っていた。

- (4) Ele disse que viria, mas não veio.

訳：彼は来ると言ったけど、来なかった。

(いずれも作例)

¹ 本発表で扱うポルトガル語に関する用語は田所・伊藤（2006）に従うものである。

以上の例のいずれにおいても、発話時と異なった RT があり、その RT と ET、ST の関係によって、文全体の外的時間関係が成り立っている。このように、Ilari & Basso (2008) では RT を含意するテンス形式についての説明があるが、絶対・相対的テンス、そして主節時基準現象については言及されていない。

また、Bechara (2006) では、Quando 節のテンス形式が現在である場合は文全体が反復性・一般化を表し、他のテンス形式である場合は主節と従属節の前後関係を表すとされている。

Quando 節における主節と従属節のテンス形式の組み合わせに関して、Neves (2000: 790-792) は、直説法で現在を表す形式と現在を表す形式か過去を表す形式と過去を表す形式かの 2 パターンがあると指摘している。また、説続法の場合は、futuro do indicativo (説続法未来形) と presente (直説法現在形)、または futuro do indicativo (説続法未来形) と futuro do indicativo (直説法未来形) という組み合わせが可能であると説明している。しかし、Neves (2000) は、従属節と主節のテンス形式が異なる可能性について、または相対的テンスや主節時基準現象については説明していない。

以上のように、ポルトガル語の Quando 節に関する先行研究では、ポルトガル語の様々なテンス形式の組み合わせや複文全体の外的時間関係について論じられてはいるが、不規則的な組み合わせ（過去を表す形式と現在を表す形式等）や相対的テンスの使用実態に関しては説明されていない。

3. 調査で扱ったコーパス及び調査方法

本研究の目的は、トキ節・Quando 節における主節時基準現象の実態を明らかにすることにある。そのため、実際の発話を扱う話し言葉コーパスでトキ節と Quando 節を検索し、分析を行った。

日本語の場合、『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』を用い、「う、く、ぐ、す、つ、ぬ、ぶ、む、る時」(ル時)、「ている、でいる、てる、でる時」(テイル時)、「た、だ時」(タ時)、「ていた、でいた、てた、でた時」(テイタ時)を検索し、研究対象に当てはまらないものを手作業で排除した。

ポルトガル語の場合は、1970 年代と 1990 年代に、リオデジャネイロ市で収録されたインタビュー (DID)、対話 (D2)、講義 (EF) を扱う話し言葉コーパスである NURC-RJ を用い、「Quando」を検索し、当てはまらないものを手作業で排除した。

検索の結果、トキ節は 3021 例 (内訳: ル時 988 文、テイル時 231 文、タ時 1740 文、テイタ時 62 文)、Quando 節は 2000 例確認した。それらの例について、従属節と主節のテンス形式を分類した後、従属節のテンスが絶対的テンスであるか相対的テンスであるか判定した。また、相対的テンスの場合、RT が主節時であるか他の RT であるか分析した。

4. 分析結果及び考察

日本語の場合、3021 例のうち、1849 例 (全体の約 61%) が絶対的テンスを表す例であり、1172 例 (全体の約 39%) が相対的テンスを表す例であった。相対的テンスを表す例の全てが、(5) (6) のように、主節と従属節のテンス形式が異なっているものであった。

(5) で大学に入る時にまた東京に出てきたんですけどね (CSJ-S03M0570)

(6) 同様に係り先が三つになった時にはえー四つ組みモデルを用います (CSJ-A03M0010)

(5) では、「大学に入る」という出来事は発話時に対する現在形を表しているのではなく、工藤 (1992)

の指摘の通り、「限界達成前の段階」を表している。また、(6)でも、従属節のタ形は発話時を基準にする過去ではなく、「限界達成後の段階」を表すものであると解釈できる。

また、相対的テンスを表す例は全て、主節と従属節が異なるものであったが、絶対的テンスを表す例でも主節と従属節が異なる例も見られた (7)。

(7) 九十九年にまーあの一私達二人で行った時も彼らとあの一會って色んな各地を案内してくれる訳です (CSJ- S05F0240)

(7) では従属節と主節のテンス形式が異なっているため、「視点の原理」に従えば、相対的テンスを表しているという解釈になる。しかし、「九十九年」という副詞成分は、従属節のタ形が表しているのが、発話者の過去の体験であることを示唆している。このことから、「行った時」は発話時を基準にする絶対的テンスであることが推測される。また、(7) が過去の体験であるため、主節のル形は現在・未来の出来事を表しているとは考えにくく、「劇的現在 (dramatic present)」を表していると考えられる。工藤 (2014: 160) によると「劇的現在」は「話し手が〈知覚体験 (目撃)〉した、過去の〈個別具体的な事象〉が、非過去形を使用することで、今目の前で起こっているかのようにありありと表現」する現在形のことであるという。(7) の主節の現在形もその用法によるものである可能性がある。つまり、主節と従属節のテンス形式が異なることは、主節と従属節の外的時間関係 (テンス) によるものではなく、話者の発話に対する態度 (ムード)、を前面化させるためであると考えられる。また、(7) のほかに、「劇的現在」を表す例は 7 例確認された。

さらに、本調査では、相対的テンスを絶対的テンスに置き換えても文意が大きく変わらない例は 56 例見られた。それらは (8) と同様に、主節と従属節で同じ動詞が用いられている (16 例) か (9) のように従属節テイル形が用いられている (40 例) ものであった。このような例は、「限界達成の前後」を問題にせず、全体的な同時性を表す例であり、(5) (6) とは別物であると思われる。

(8) でえー集計する時にはこのここがないものは不使用として集計しました (CSJ- A06F0621)

(9) で前し仕事私があの仕事をしている時にある人から夢って何って聞かれたんですけど (CSJ- S10F0437)

一方、ポルトガル語の場合、2000 例のうち 1956 例 (約 98%) は絶対的テンスを表すものであり、44 例 (約 2%) は相対的テンスを表すものであった。これを日本語のデータと比較すると、日本語の方が相対的テンスを用いる頻度が高いということを読み取ることができる。

また、相対的テンスを表す 44 例のうち、15 例は *pretérito mais-que-perfeito* (大過去)、8 例は *futuro do pretérito* (過去未来) というポルトガル語の典型的な相対的テンス形式を用いるものであった。この結果は Ilari & Basso (2008) で指摘されていることと合致している。しかし、以下の (10) (11) のように、RT を含意しないテンス形式を用いて相対的テンスを表す例は 21 例確認された。

(10) Mas o plano não dá tempo pra fazer, quer dizer, quando a bomba já estourou, trator já passou, é que vão fazer o plano. (NURC-RJ DID135)

訳：でも、計画を立てる時間がない、というか、爆弾がすでに爆発し、トラクターがすでに通

っている時に、計画を立てるんだ。

(11) (...) quando ele praticou um pecado, muitas vezes pede perdão ao santo (...) (NURC-RJ DID76)

訳：その人は罪を犯した時に、聖人に謝罪する (...)

(10) (11) では、現在の反復性・一般化が表されているため、主節のテンス形式は現在形になっている (*vão fazer, pede perdão*)。しかし、従属節のテンス形式が *pretérito perfeito* (完成過去) であり、主節とは異なっている。これは、従来の研究における捉え方では説明が困難な例である。(10) (11) のいずれも全体的には反復性・一般化を表す例であるため、従属節の *pretérito perfeito* は発話時を基準にしているとは考えにくく、主節時を基準時とするものであると思われる。より正確に言うと、これらの過去形は、工藤 (1992) で説明されている「限界達成後の段階」を表していると考えられる。つまり、従属節の出来事が限界を達成した後、主節の出来事が成立するという解釈になる。また、(10) の訳文では、ポルトガル語の *pretérito perfeito* がテイル形に訳されている。このテイル形は同時性を表すものではなく、パーフェクト性(工藤 1989)という派生アスペクト的意味を表しているものである。工藤(1989)によるとパーフェクトはある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力を持っていることを表すという。また、すでに実現している出来事を扱うものであるため、テンス的には過去を表すものであると説明されている。このことから、(10) の過去形はパーフェクト性を表すものであると見なすことができる。つまり (10) の従属節は「限界達成後の段階」と解釈されるものの、その解釈は「ある時点において、それよりも前に実現した運動」であることが表されることによって導かれていると思われる。

さらに、*Quando* 節でも、日本語と同様に、主節と従属節のテンス形式が異なっていながら、相対的テンスを表していない例が 13 例確認された。このような例は、(8) と同様に劇的現在形、つまりモード性を前面化させた例である (12)。

(12) No fim, quando ele veio perguntar, eu digo: bom, não é vantagem, porque eu sou brasileira (NURC-RJ DID221)

訳：結局、彼が聞いてきた時、私は「まあ、私はブラジル人だから、それは不利だね」と言った (現在形)。

(12) では、話者が過去の知覚体験を述べているにも拘らず、主節では、現在形を使っている。その現在形は、体験したことを今日の前で起こっているかのように描写するための劇的現在であると考えられる。

以上のように、トキ節と同様に *Quando* 節にも主節時基準現象があることが明らかになった。しかし、日本語のトキ節に見られる主節時基準現象とポルトガル語の *Quando* 節における主節時基準現象について、相違点が 3 点あることが本調査で明らかになった。以下、各点について説明する。

まず、一点目は、主節時基準が義務的であるか否かということである。日本語では、従属節のテンス形式が限界達成前、或いは達成後かを表す場合、ル形・タ形の置き換えが不可能であることが指摘できる。例えば、(13) の「聞かせた時」を「聞かせる時」に置き換えると、「聞かせた後の反応」であるか「聞かせる前の反応」であるかという文全体の解釈に違いが生じる。これは、日本語の場合は主節時基

準が義務的であるということを示唆している。

(13) (...) 検査実験としてその一訓練に使っていない音を新たに聞かせた時に猿がどういう風に反応するかというのを調べる為に (...) (CSJ-A01M0056)

日本語とは違って、ポルトガル語の **Quando** 節には、随意的な主節時基準と義務的な主節時基準があることが、今回の調査で明らかになった。

(14) a. quando ele praticou um pecado, muitas vezes pede perdão ao santo ((11) の再掲)

b. quando ele pratica (現在形) um pecado, muitas vezes pede perdão ao santo

訳：罪を犯した時に、聖人に謝罪する (...)

(15) (...) É, porque quando a gente escuta o barulho é que o raio já caiu, não é isso? (NURC-RJ DID21)

訳：音が聞こえたら、雷はもう落ちているということだ。

(14a) では、従属節の過去形は主節時を基準時とするものであるが、その過去形を現在形に置き換えても (14b) 文全体の習慣性が保たれ、主節と従属節の時間関係に違いが出ない。このような文の主節時基準は随意的なものであると考えられる。一方で、(15) では、従属節で現在形、主節で過去形 (パーフェクト性を表す **pretérito perfeito**) が用いられているが、テンス形式の置き換えが不可能である。このような相対的テンスは義務的なものであると考えられる。

トキ節と **Quando** 節の間に見られる 2 つ目の相違点は、従属節時が基準時になれるか否かという点である。(15) の従属節のテンスは主節の基準時になっていることから、ポルトガル語の **Quando** 節では主節時基準のみではなく、従属節時基準の場合もあると考えられる。(15) は (14) と同様に反復性・一般化を表すものであるが、(14) と違って、その反復性を表しているのは現在形を採った従属節である。このような例はポルトガル語のデータでは 5 例確認できたのに対して、日本語のデータでは見られなかった。つまり、トキ節では主節時が従属節の基準時になることしかできないが、**Quando** 節では従属節時が主節の基準時になることもあるという点が指摘できる。この現象は日本語とポルトガル語の従属節の従属度の違いに起因しているものと考えられる。工藤 (1995) によると、日本語では主節のテンスは絶対的テンスにしかねないという。換言すると、従属節と違って、アスペクトを前面化させてテンスの解釈を発話時から離すことは不可能である。一方で、ポルトガル語では、(15) のように、主節がアスペクトを前面化させて、文全体のテンス解釈を従属節のテンス形式に委ねることができる。文全体のテンス解釈が主節のテンスに依拠しているという点から見ると、トキ節の方が主節に依存しており、**Quando** 節より、従属度が高いと思われる。

トキ節と **Quando** 節の間に見られるもう一つの相違点は、文全体のアスペクチュアリティである。トキ節の場合は、(5) のように一回性を表す文でも、(6) のように反復性・一般化を表す文でも主節時基準現象が起こりうるということが本調査で明らかになった。それに対して、NURC-RJ のデータから抽出された **Quando** 節の全ての例は、反復性・一般化というアスペクチュアリティを表すものであった。即ち、トキ節には文のアスペクチュアリティの制限がないのに対して、**Quando** 節には文のアスペクチュアリティの制限がある可能性がある。

以上のように、話し言葉におけるトキ節でも **Quando** 節でも主節時基準現象が起こりうるが、量的な違いも（トキ節の方は相対的テンスの使用頻度が高い）質的な違い（文のアスペクチュアリティの制限、主節時基準が義務的であるかどうか、従属節時が基準になれるかどうか）も見られることが明らかになった。

5. 終わりに

本発表では、話し言葉におけるトキ節・**Quando** 節の主節時基準現象の実態について触れ、その二つの複文節の相違点を挙げてきた。調査の結果、トキ節と **Quando** 節では主節時基準現象が起こりうるが、両言語の複文節には量的・質的な違いがあることが明らかになった。この結果は、機械翻訳で使われる翻訳規則の作成の一助になると思われる。

また、今後の課題として、ポルトガル語と日本語における時間を表す他の複文節を対照的に分析することや、書き言葉コーパスに見られる時間を表す複文節のテンス形式の使用実態を調べることが挙げられる。

参考文献

- Bechara, Evanildo (2006) *Moderna Gramática portuguesa*. Rio de Janeiro, Editora Nova Fronteira
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*. Cambridge University Press
- 濱田 美和 (1998) 「トキ節のテンス」『富山大学教育学部紀要』A 文科系 5、pp. 1-9
- Ilari, Rodolfo & Basso, Miguel (2008) O verbo. In: *Gramática do português culto falado no Brasil*, vol.2: *Classes de palavras e processos de construção*. [ed] Rodolfo Ilari & Maria Helena de Moura Neves. Campinas, SP: Editora da Unicamp, pp. 163-365
- 工藤 真由美 (1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学』3、pp. 53-118
- 工藤真由美 (1992) 「現代日本語の時間の従属文」『横浜国立大学人文紀要』第二類 39 集、pp. 169-192
- 工藤 真由美 (1995) 『テンス・アスペクト体系とテキスト—現代日本語の表現—』ひつじ書房
- 工藤 真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』くろしお出版
- Neves, Maria Helena de Moura (2000) *Gramática de usos do português*. São Paulo: Editora Unesp.
- Reichenbach, Hans (1947) The tenses of verbs. In: *Elements of symbolic logic*. New York: The MacMillan Company, pp. 287-298
- 田所 清克・伊藤 奈希砂 (2006) 『「図と表で整理する」ブラジルポルトガル語文法』国際語学社

【調査資料】

- 国立国語研究所 (2018) 『日本語話し言葉コーパス』<https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2019 年 3 月 18 日確認)
- Projeto Norma Culta Urbana Rio de Janeiro (NURC-RJ). <http://www.nurcrj.lettras.ufrj.br/> (2019 年 3 月 18 日確認)